

清少納言の枕の草紙に云、九月ばかり夜一よふりあかしたる雨の、けさはやみてあさ日の花やかにさしたるに、せんざいの菊の露こぼるばかりぬれかゝりたるもいとをかし。すいがいらもんすゝきなどのうへに、かひたる蜘蛛のすのこぼれのこりて、所々に糸もたへざまに、雨のかゝりたるがしろき玉をつらぬきたるやうなるこそ、いみじふあはれにをかしけれ。すこし日たけぬれば、萩などのいとおもげなりつるに、露のおつるに枝のうちうごきて、人も手ふれぬにふとかみざまへあがりたる、いみじういとおかしといひたること、人のこゝちにはつゆおかしからじとおもふこそ又おかしけれ。兼好のつれぐ草に、家にありたき木は、松さくら、松は五葉もよし、花はひとへなるよし、八重桜はならの都にのみありけるを、此ころぞ世におほく成侍るなる。吉野の花左近のさくらみなひとへにてこそあれ、と書れたり。抑平安京遷都の初、秦川勝が宅を転じて紫宸殿とし給ひ、階下に古梅あれば其俣に植置れたり。「天曆御記」厥后李部王の家の桜を、阪上瀧守詔を奉て移し植らる、これを南殿桜左近桜ともいふ。御階橋は橋太夫秦保国の後園の名木なり、年代ふりて後、天徳の頃右近将監勅を奉て植継ありしより、右近橋と号くかし。こゝもかれこれを都泉林の基とするも可ならんや。

夫 木 こゝのへや玉しく庭のむらさきの袖をつらぬる千世の初春

俊 成